2020 保健大学

おとなのワクチン第8回
「子宮頸がんワクチン」

講師
宮田智仁
副院長

みなさんこんにちは。今回は「子宮頸がんワクチン」の話をします。

おとなのワクチンというタイトルですが、このワクチンは実は主に中学～高校生に向けた若者向けのワクチンです。しかしこの時期に接種をしなかった若い成人女性の方々には接種を考えてもらいたいと思って、おとなのワクチンの話の一つに入れさせていただきました。

感染しても多くの人は無症状

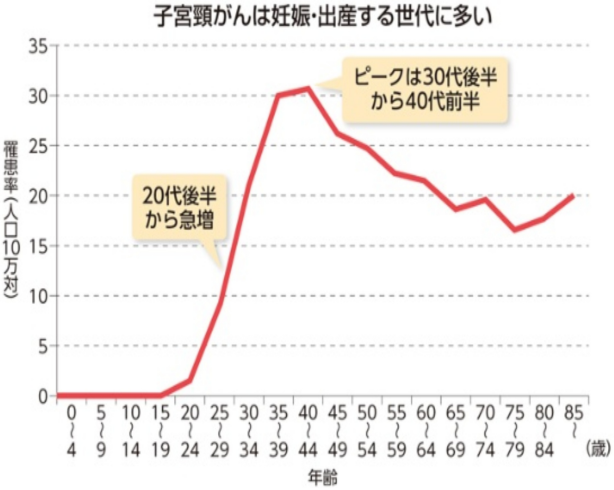
子宮頸がんワクチンと言いますが、これはＨＰＶ（ヒトパピローマウイルス）というウイルスに対するワクチンです。子宮頸がんは、このＨＰＶ感染が基本となり起こってくる癌です。ＨＰＶに感染しても多くの人は無症状のまま一過性の感染に終わり、病気を発症することはありません。しかしＨＰＶが持続的に感染し続ける一部の女性に対して子宮頸がんが発生しますＨＰＶはごくありふれたウイルスで、性交渉で感染をします。

性交渉の経験のある女性のうち50～80％は、生涯で一度はＨＰＶの感染機会があると推計されています。したがって、性交渉の経験のある女性は誰にでも子宮頸がんを発症する危険性があると言えます。

好発年齢のピークは30代～40代

この子宮頸がんは、近年増加傾向にあり、また好発年齢が20代後半から40代前半にピークがあります（図1）。女性において急増して30代後半から40代前半にピークがあります（図1）。女性において当たり「マザーキラー」という名がつくほど、その家族に大きな影響を与えてしまう疾患です。

こんな罪作りながんですが、ＨＰＶワクチンを接種することで発症を予防できます。しかし日本ではこのワクチン接種率は極めて低くなっている現状があるのです。



▲図１　子宮頸がんの年代別罹漢率

２００９年10月に日本国内でＨＰＶワクチンが接種できるようになり２０１３年４月に「12歳～16歳（小学６年生～高校１年生相当の女性）」を対象として定期接種が開始となりました。

しかしたったその２か月後の６月には定期接種の積極的勧奨を差し控えるという異例の事態となってしまいました。接種した少女たちの中で、接種後から全身の痛みや頭痛・失神、けいれん、月経不順などの症状を訴える人の報告が出され、大きく報道されたことにより、厚生労働省が接種勧告を取りやめてしまいました。その後、これらの症状はＨＰＶワクチンだから起こり得るものではなく、他の注射などでも同程度に発生するものだと判明してきました。もちろん障害がでてしまった方に対する治療の補償はきちんとされるべきでありＨＰＶワクチン接種で起こったものではないと否定するものではありません。

しかしだからと言って、多くの女性に恩恵をもたらすＨＰＶワクチン接種の機会を奪ってしまうことは、将来に不利益をもたらすことになります。

12歳～16歳の女性は接種を

世界に目を向けると、ＨＰＶワクチン接種率が低いのはほぼ日本だけという現状です。

12歳～16歳の女性の方は、現在でも定期接種ワクチンとして無料で接種ができます。この機会を逃すことなくきちんと接種することをお勧めします。また、知らずに時期を逃してしまった女性でも性交渉の経験のない・または少ない方は、ＨＰＶワクチン接種をご検討下さい。

そして子宮がん検診も組み合わせて、予防と早期発見に努めていきましょう。

次回は、最終回「渡航ワクチン」の話をしたいと思います。